『教育雑誌』に発見された グリム童話の明治期翻訳の底本について

西　口　拓　子

Die in der Zeitschrift “Kyoiku Zasshi” neu aufgefundenen Grimm’schen Märchen

Hiroko NISHIGUCHI

はじめに

明治期に日本語に翻訳されたグリム童話が新たに 15 話、府川源一郎により発見された。その全てが、現在知られている限りでは本邦初訳である。それは『教育雑誌』の「湖海談林」欄に 1887（明治 20）年「1 月 15 日から 6 月 25 日までの約半年間、17 回にわたって翻訳紹介され」、そのうち 13 回には挿絵が一枚ずつ添えられている。これらはイギリスの挿絵画家ウェーナート（Edward Henry Wehnert 1813-1868 年）の挿絵の模刻である。[1]

世界的にみれば、日本におけるグリム童話の翻訳受容の開始は遅い。これまでに明らかになっている限りでは、英語のリイドル（読本）の邦訳に収められたグリム童話が、日本語への翻訳で最も古く、1873（明治 6）年であっ

[1] 府川源一郎「『教育雑誌』に翻訳されたグリム童話」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 28 号、2015 年、1-13 頁。府川源一郎氏には『教育雑誌』の中に新発見された貴重な原資料を披見させていただき、心より感謝申し上げる。なお『教育雑誌』に訳出されたグリム童話は変体仮名を混ぜて印刷されており、判読に苦しむ箇所がいくつもあった。本稿での引用には、斎藤達哉氏ら作成の対照表が不可欠であった。心より感謝申し上げる。「変体仮名のこれまでとこれから 情報交換のための標準化」（高田智和、矢田勉、斎藤達哉著『情報管理』国立研究開発法人 科学技術振興機構、Vol.58、no. 6、438-446、2015 年）444 頁の表を参照した。

た。[2] 単行本として最も早かったのが 1887（明治 20）年の『西洋古事 神仙叢話』（11 話所収）で、これと同年に計 15 話のグリム童話が『教育雑誌』にも連載されていたことが明らかにされたのである。訳出されたグリム童話を、府川の論文より引用する。

第 22 号 1 月 15 日　「「スクアイヤ」、コーブスの話」【コルベスさん】[3]（KHM 41）[4]
第 23 号 1 月 25 日　「狼（おほかみ）と人（ひと）との話（はなし）」【狼と人間】（KHM 72）
第 24 号 2 月 5 日　「狐（きつね）と猫（ねこ）との話（はなし）」【狐と猫】（KHM 75）
第 25 号 2 月 15 日　「祖父（ぢぢ）と孫（まご）との話（はなし）」【年とった祖父と孫】（KHM 78）
第 26 号 2 月 25 日　「猫（ねこ）と鼠（ねづみ）と友（とも）となりたる話（はなし）」【猫と鼠の共暮らし】（KHM 2）
第 27 号 3 月 5 日　「金色（こがねいろ）の鵞鳥（ぐわてう）の話（はなし）」【金の鵞鳥】（KHM 64）
第 28 号 3 月 15 日　「盗賊（どろぼう）の花婿（はなむこ）の話（はなし）」【強盗の婿】（KHM 40）
第 29 号 3 月 25 日　「アリースの話（はなし）」【賢いエルゼ】（KHM 34）
第 30 号 4 月 5 日　「デーム、トルードの話（はなし）」【トルーデおばさん】（KHM 43）
第 31 号 4 月 15 日　「老狗（ろうく）「サルタン」の話（はなし）」【老ズルタン】（KHM 48）
第 32 号 4 月 25 日　「狼（おほかみ）と狐（きつね）との話（はなし）」【狼と狐】（KHM 73）
第 33 号 5 月 5 日　「マダム、ホールの話（はなし）」【ホレおばさん】（KHM 24）
第 34-35 号 5 月 15 日、25 日（2 回）　「鷦鷯（みそさざい）と熊（くま）の話」【みそさざいと熊】（KHM 102）
第 36 号 6 月 5 日　「狐（きつね）と狼（おほかみ）との話（はなし）」【狐と代父を頼む奥様】（KHM 74）
第 37-38 号 6 月 15 日、25 日（2 回）　「怜悧（りかう）なる農夫」【賢い人たち】（KHM 104）

---

[2] 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』第 9 巻第 4 号、岩波書店、2008 年、140-151 頁。
[3] 本稿では、明治期の邦訳タイトルと区別するため、『グリム童話集』でのグリム兄弟によるオリジナルのタイトルの和訳は【 】で示す。
[4] 慣例に従い、『グリム童話集』（Kinder- und Hausmärchen）の各話に、第 7 版（1857 年）での収録番号を KHM とともに示す。

1. 底本

翻訳者に関しては、府川は粟屋関一と推測している。[5] さらに、各話のタイトルに続けて「グリンムス、フェーヤリー、テールス譯出」と書かれていることから、底本を英語訳とみている。邦訳タイトルにも英語の痕跡がみられる。ドイツ語の原題 “Herr Korbes”（下線は筆者による。以降も同様）が、邦訳では「「スクアイヤ」、コーブスの話」となっており、英語の squire がそのままカタカナで用いられているからである。同様に “Die kluge Else（独）” が「アリースの話」に、“Frau Trude（独）” が「デーム、トルードの話」に、“Frau Holle（独）” が「マダム、ホールの話」となっている。下線部は、邦訳の底本として英語訳が使われたことを示している。

筆者のこれまでの研究では、挿絵が邦訳の底本のヒントとなってきた。1892（明治 24）年の『小學講話材料 西洋妖怪奇談』（以下『西洋妖怪奇談』と略す）や 1909（明治 42）年の『グリム原著 家庭お伽噺』（小川尚栄堂）では、ウェーナートの挿絵が利用されていることから、その挿絵の付いた英語訳（1853 年初版）が底本とされたことが明らかになった。[6] ウェーナートは挿絵画家で、英訳者名は明らかになっていない。本稿では以下、この英語訳をウェーナート版と呼ぶ。[7] 前述の通り『教育雑誌』の挿絵も全てウェーナートによるのだが、ここでもウェーナート版が翻訳の底本として使われたのだろうか。

府川が指摘するように、第 37-38 号に「怜悧なる農夫」が訳出されていることが問題である。ウェーナート版にはこの話は掲載されていないからだ。原典の【賢い人たち】（KHM 104）が『グリム童話集』に採用されたのは 1857

---

[5] 府川 2015 年、9 頁。

[6] 西口拓子「澁江保訳『西洋妖怪奇談』の挿絵と底本について――挿絵からみた明治期グリム童話翻訳」『専修人文論集』第 92 号、専修大学学会、2013 年、143-164 頁。西口拓子「和田垣謙三・星野久成訳『グリム原著 家庭お伽噺』――底本と翻訳」『専修人文論集』第 99 号、専修大学学会、2016 年、451-477 頁。

[7] ウェーナート版に関しては、拙論（西口 2016 年）参照。本稿での引用には筆者蔵の以下の版を用いる。Household Stories. Collected by the Brothers Grimm. With Two Hundred Illustrations by E. H. Wehnert. London. 刊行年は推定 1900 年前後である。

年（第 7 版）からで、ウェーナート版が刊行されたのは 1853 年だからだ。ウェーナート版には【賢い人たち】の代わりに、『グリム童話集』の第 6 版まで 104 番として掲載されていた【忠実な動物】が訳出されている。『教育雑誌』の連載の最後を飾る「怜悧なる農夫」のみは、ウェーナート版以外のテクストを底本としたということなのだろうか。

「怜悧なる農夫」以外の邦訳の底本をウェーナート版とみなすにも不都合な点がある。それらは全て府川が挙げている通りで、邦訳タイトルにみられるカタカナの言葉が、ウェーナート版のタイトルの英語と一致しないのだ。[8] 一致しない箇所を下線で示す。

『教育雑誌』でのタイトル	英語・ウェーナート版タイトル	ドイツ語・グリム版タイトル
「スクアイヤ」、コーブスの話	Herr Korbes	Herr Korbes (KHM 41)
デーム、トルードの話	The Old Witch	Frau Trude (KHM 43)
マダム、ホールの話	Old Mother Frost	Frau Holle (KHM 24)

邦訳タイトルに、底本とは異なる英語をカタカナで表記する理由は考えにくい。下線部は英語の底本を踏襲していると仮定して、これらをタイトルに含む英語訳を探してみたい。

【賢い人たち】も訳出した英語訳は、『グリム童話集』第 7 版以降、つまり 1857 年以降に刊行されているはずである。有名なものには、1868（1872）年のポール訳[9] と 1884 年のハント訳[10] がある。【賢い人たち】はポール訳には “Clever People”、ハント訳には “Wise Folks” のタイトルで訳出されている。先の 3 話のタイトルも比べてみよう。

---

[8] 府川 2015、12 頁の注 8 参照。

[9] Paull, Mrs. H. B. (transl.): Grimm's Fairy Tales. A New Translation. London. 刊行年は 1868 年もしくは 1872 年と推定されている。これは全訳ではなく、128 のグリム童話を訳出したものである。タイトル数が 130 なのは、グリムの【小人たち】(KHM 39) の中の短い 3 話を独立させて掲載しているためである。

[10] Hunt, Margaret (transl.): Grimm’s Household Tales. With the author's notes. Translated from the German and edited by Margaret Hunt. 2 vols., London 1884. これは『グリム童話集』の全訳である。

『教育雑誌』	ウェーナート版 1853	ポール訳 1868（1872）	ハント訳 1884
「スクアイヤ」、コーブスの話	Herr Korbes	The Troublesome Visitors	Herr Korbes
デーム、トルードの話	The Old Witch	なし（全訳ではないため）	Frau Trude
マダム、ホールの話	Old Mother Frost	The Widow's Two Daughters	Mother Holle

「スクアイヤ」、「デーム」、「マダム」という言葉は、ウェーナート版だけでなく、ポール訳、ハント訳においても使われていないことが分かる。

補足として、「アリースの話」（KHM 34）の女性名（ドイツ語では Else）を確認すると、Alice としているのはウェーナート版の "Clever Alice" のみで、ポール訳の "The Clever Elfe" やハント訳の "Clever Elsie" を「アリース」というカタカナにするのには無理がある。以上より、ポール訳、ハント訳を翻訳に用いたと考えるのは難しい。そこで考察対象を広げて、少し以前の 1855 年のデイビス訳[11] で、先の 3 話のタイトルをみてみよう。

Squire Korbes・・・「「スクアイヤ」、コーブスの話」
Dame Trude・・・「デーム、トルードの話」
Madam Holl・・・「マダム、ホールの話」

すると下線部が、三つとも一致していることが分かる。「アリースの話」も "Wise Alice" で、女性名が一致している。【賢い人たち】も "The Wise Peasants" というタイトルで訳出されている。『教育雑誌』でのタイトルは「怜悧なる農夫」で、ドイツ語の「人」ではなく「農夫」となっており、デイビス訳の Peasants と一致している。[12]

[11] Davis, Matilda Louisa (transl.): Home Stories, collected by the Brothers Grimm, Newly Translated. London 1855.
[12] ドイツ語は Leute で複数形である。デイビス訳も複数形の Peasants である。ポール訳は "Clever People"、ハント訳は "Wise Folks" としている

2. デイビス訳の「ミステリー」

【賢い人たち】は、既に述べたように『グリム童話集』への初出が 1857 年である。それにもかかわらず、その 2 年前にデイビスによる英語訳に掲載されているのはどういうことだろうか。英語圏のグリム童話受容を研究した Sutton は、刊行前の原稿をどのようにして英訳者のデイビスが入手出来たのかは、“mystery” だとしている。[13]

そこで考えなくてはならないのが、『グリム童話集』と言っても、複数の版が存在することだ。現在、翻訳の底本に用いられるのは、通例は 1857 年の第 7 版である。[14] これがグリム兄弟が存命中に手掛けた最後の「大きな版」だからで、ここには 200 番までの Märchen と 10 話の Kinderlegenden が収められている。ここで忘れてはならないのは、選集版の存在である。好評を博した 1823 年の英語訳（テイラー訳、選集）に刺激を受けて、グリム兄弟が 50 話を選び、「小さな版」として 1825 年より出版したものだ。グリム兄弟が手掛けた最後の「小さな版」は 1858 年の第 10 版だが、第 9 版は 1853 年で、デイビス訳に先んじている。この第 9 版の 39 番目に【賢い人たち】が掲載されているのである。つまり、【忠実な動物たち】がこれと差し替えられたのは 1853 年だったのである。[15] デイビスが「小さな版」をも利用していたと考えれば、“mystery” は解決する。デイビス訳は、タイトルベースで 91 話[16] あるが、ほとんどが「大きな版」の第一巻から採られている。第一巻にない 9 話は全て「小さな版」第 9 版に掲載されている話である。[17]

---

[13] Sutton, Martin: The Sin-complex: A Critical Study of English Versions of the Grimm's Kinder- und Hausmärchen in the Nineteenth Century. Kassel 1996.

[14] 『グリム童話集』第 7 版刊行前の翻訳は、底本に注意が必要である。前述の通りウェーナート版は 1853 年が初版で、テクストを比較考察すると、『グリム童話集』第 6 版を翻訳したものであることが分かる。（西口 2013 年参照）

[15] このことは、レレケが注釈で既に指摘している。Rölleke, Heinz (Hrsg.): Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen. 3 Bde. Stuttgart 2010. Bd. 3, S. 502.

[16] タイトル数は 91 だが、グリム童話の 88 話に相当する。グリムの【狐の奥さんの結婚式】（KHM 38）には 2 話、【小人たち】（KHM 39）には 3 話が収められているが、デイビスはそれらを独立させて掲載しているためである。

[17] 【賢い人たち】以外の 8 話は、「大きな版」第 6 版第 2 巻もしくは「小さな版」第 9

タイトルが一致する上記の話では、デイビス訳が底本として使われた可能性が高い。一方で、挿絵がウェーナートによるものであることも明白である。月に３回発行された『教育雑誌』という雑誌への、半年あまりにわたる連載だったため、途中で底本を変えた可能性も排除はできない。次節では、『教育雑誌』に掲載された 15 話を全て、掲載された順にウェーナート版とデイビス訳の両方と比較して確認する。

3. 英語訳との比較

例えば「マダム、ホールの話」のように、大胆に簡略化された話は、底本を見極めることが困難である。その他の話でも、日本風に変更されている箇所は、英訳本の特定には役立たない。そのため本節では、非常に細かい点に、英語版の特徴が残されていないかどうかを見ていくことになる。

3.1.「「スクアイヤ」、コーブスの話」【コルベスさん】（KHM 41）

タイトルが、デイビスの英語訳の “Squire Korbes” に一致しているが、テクストも念のため確認してみよう。

この話では、コルベス（コーブス）氏が留守の間に、鶏、猫、あひる、卵、留め針などが、勝手に家に上がり込む。帰宅したコルベス氏は、猫に灰をかけられたり、椅子で留め針に刺されたり、散々な目にあう。帰宅後の場面を、まずはドイツ語と『教育雑誌』の翻訳で比較してみよう。

> グリム: そこへコルベスさんが帰ってきて、暖炉のところへ行き、火を起こそうとしました。すると猫が、コルベスさんに灰を顔一面に投げつけました。（6-Bd.1. S. 247）[18]

版による。

[18] 本稿の『グリム童話集』からの引用は、第 6 版（Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 6. Aufl. 2 Bde. Göttingen 1850）による。グリム兄弟が手掛けた最後の版は第 7 版だが、ウェーナート版もデイビス訳も、それ以前に刊行されているためである。第 7 版（7. Aufl. 2 Bde. Göttingen 1857）も確認し、異同のある場合のみ言及する。日本語訳は以下を参照した。野村泫訳『完訳グリム童

『教育雑誌』: 斯(かく)て程なくコーブスハ返(かへ)り來(きた)りしが斯(かか)ることの有(あり)ぞとハ神ならぬ身の知るよし無けれバ先づ火をおこさんものと火鉢の傍に至りけるに思ひがけずも猫中(うち)より灰を面(かほ)一面に飛バしけれバ（第 22 号、下線は筆者）[19]

ドイツ語版にはみられなかった下線部の表現に着目して、英語訳を比べてみよう。

Wehnert: Soon afterwards Herr Korbes returned, and going to the hearth poked the fire; then the Cat threw the ashes in his face. (S. 138)

Davis: The squire shortly afterwards came home, and not knowing how his house had been taken possession of, went to the stove to make a fire, when the cat flung some ashes in his face; (S. 169)

デイビス訳の下線部が、「斯ることの有ぞとハ」「知るよし無けれバ」という翻訳のもとになったとみられる。ウェーナート版には相当する表現は見当たらない。タイトルや翻訳文の比較考察からは、翻訳の底本はデイビス訳とみられる。邦訳ではさらに「神ならぬ身の」という表現が付け加えられていることにも注目できる。

3.2.「狼と人との話」【狼と人間】（KHM 72）

人間は非常に強い、という狐の忠告を聞かずに、狼は人間に襲いかかる。人間は、狼を散弾銃と山刀で撃退する。人間が山刀を抜いた様子を狼は次の

話集』全 7 巻、ちくま文庫、2005-2006 年。

[19] 『教育雑誌』は縦組みである。ヨーロッパの人名はカタカナで書かれ、それに傍線が引かれ、読者の理解を助けている。ここでは「コーブス」に傍線が付されているが、本稿の引用では省略する。その他、引用文中の踊り字も、「々」以外は使用しない。

ように表現している。

> グリム：すぐ側まで行くと、人間は体からぴかぴかの肋骨を抜き出して、それで殴りかかってきたから、俺はあやうく死ぬところだった（6-Bd.1. S. 441）

> 『教育雑誌』：近く打(うち)かかれバ体の脇より磨きたてて ピカピカ光る肋骨をとりいだしてサンザン我を打(なぐ)りつけ死ぬる目に合したり（第23号）

> Wehnert: and as I approached quite near, he drew out a naked bone from his body, and beat me with it till I fell, as it were, dead before him. (S. 239)

> Davis: and when I got nearer to him, he took a polished rib out of his body, with which he beat me so severely, that I had nearly been left for dead on the ground. (S. 304)

下線部の一致により、この話でもデイビス訳が使われたとみられる。下線部を比べると、ウェーナート版のみ骨のどの部位かを規定していない。こうした細部に翻訳者による異同があるため、それを丹念に見ていくことで、底本を絞ることができるのである。

3.3.「狐と猫との話」【狐と猫】（KHM 75）

ひとつの技（芸）しか心得ていないと言う猫に対し、狐は次のように自慢をする。

> グリム：「それだけか」と狐が言いました。「おれは①百の技を使いこなす。そのうえ知恵がたくさん詰まった袋を持っている。かわいそうなやつだな。俺について来い。犬から②逃げる方法を教えてや

ろう」（6-Bd.1. S. 447）

『教育雑誌』: 其時(そのとき)狐ハ猫をジロリと見やりて冷笑(あざわら)ひ只(たつ)た其れぎりか可哀(かあひさう)相な奴だ己(おれ)を見ろ己(おれ)ハ③藝(げい)といふたら百も千も覚(おぼ)へてゐるが外に狡猾といふ 寶(たから) を袋一杯につめこんで居るぞ④アノ犬位ハ何でもなひ貴様ハ此が恐いとハサテモサテモ意氣地なしの天邊(てつぺん)だコリヤ猫の耄耋(もうろく)め己(おれ)が後について來ひ己が見事犬の馬鹿者を⑤欺(だま)して見せるから感服して蔭から見て居やがれ（第 24 号）

下線部③⑤の表現がドイツ語の①②と異なっている。英語ではどうだろうか。

Wehnert: “Oh, is that all?” returned the Fox; “why, I understand a ⑥hundred arts, and have, moreover, a sackful of cunning! I pity you! Come with me, and I will show you how to ⑦escape the hounds.” (S. 225)

Davis: “Is that all?” returned the fox, contemptuously: “I am master of a ⑧thousand arts; and besides these, have a whole sack-full of cunning tricks. I pity you! Come with me, and I will show you how to ⑨deceive the dogs.” (S. 308)

邦訳の下線部⑤に「犬をだます」とあるのはデイビス訳の下線部⑨によるとみられる。ウェーナート版では原作通り「犬から逃げる」となっているからだ。「技」の数も、ドイツ語とウェーナート版では百にすぎないが、邦訳では「百も千も」と「千」という数字が出ている。これもデイビス訳の⑧によるとみられる。ただし、デイビス訳では「千」としか書かれていない。語呂を良くするために「百も千も」としたのか、それともウェーナート版をも読んで「百も」という表現が出てきたのかまでは特定できない。ただし、本節で考察する 15 話全体を考慮すれば、底本としてはデイビス訳のみに依拠し

ている可能性が非常に高い。ウェーナート版の特徴が踏襲されたとみられる箇所は、今回の考察からは見つからなかったからである。例えば、次節で考察する「祖父と孫との話」のウェーナート版テクストには誤訳とみられる箇所があり、それがウェーナートによる挿絵にも描かれているのだが、邦訳にはそれは踏襲されず、デイビス訳が使われている。

下線部④は、威勢の良い台詞だが、これは英語訳にもみられない。邦訳の段階で加筆されたものとみてよいだろう。

3.4.「祖父と孫との話」【年とった祖父と孫】（KHM 78）

図 1　グロート・ヨハン画
【年とった祖父と孫】
Freyberger 個人蔵[20]

図 2　ウェーナート画
【年とった祖父と孫】
筆者蔵

この話は、非常に短いが、変更された箇所が多いため少し詳しく見てみよう。

食事をこぼしたり、椀を落としたりする老父を、息子夫婦はテーブルにつかせずストーブの後ろに追いやり、木の椀で食べさせる。その様子は、ドイツの挿絵画家グロート・ヨハンが細かに描いている（図 1）。それを見た 4 歳

[20] Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Mit Illustrationen von P. Grot Johann und R. Leinweber. Stuttgart u. a. 1893.

の子どもが、かいば桶を作る。何をしているのか問うと、将来はこれで両親に食べさせる、と言うのだ。それを聞き、自分たちの仕打ちの酷さに気付いた夫婦は行動を改める。この話の最後の部分を比較してみよう。

> グリム：二人はすぐに、年とった祖父をテーブルへ連れてきました。それからは、いつも一緒に食事をさせ、少しくらいこぼしても、何も言わなくなりました。(6-Bd.1. S. 461)

> 『教育雑誌』：此までの不孝を謝して①肉を具へて之に食はしめしが此時よりして夫婦の者ハ至(いたつ)て老人に②孝行を盡(つく)し其他總(としより)て年古て弱きものをば懇ろにいたはりけり（第 25 号）

グリム版では夫婦は文句を言わなくなるのみで、邦訳の下線部②で「孝行」を尽くしているのは、日本的な加筆のようにみえる。英語訳を見てみよう。

> Wehnert: and henceforth they let the old Grandfather sit at table with them, and always take his meals there, and they did not even say anything if he spilled a little upon the cloth. (S. 237)

> Davis: and from this time they ③showed all possible kindness to him, and were indulgent towards those infirmities which were the effect of age and weakness. (S. 317)

デイビス訳の下線部③に、親切の限りを尽くすとある。一方のウェーナート版には、該当する表現はなく、積極的に親切な行為を行っているとは書かれていない。この箇所に関してもウェーナート版は、ドイツ語の原文に近い。ここからも『教育雑誌』の翻訳がデイビス訳に近いことが分かる。下線部②に日本で重んじられた「孝行」という言葉を用いたのは日本の翻訳者である。

下線部①で、当時の日本でとりわけ高級品だった肉を供しているのに着目しよう。ドイツ語にも英語にも相当する箇所はない。邦訳の引用部の直前に

は「老人をば戸棚より引出」すとある。冒頭で夫婦が老父を「戸棚の中に押込めて」いるのに対応している。この仕打ちは邦訳のみで行われており、グリム版でも英語訳でも、ストーブの後ろに追いやるのみである（グロート・ヨハンによる図 1 を参照）。当時の日本ではストーブが一般的に知られていなかったために、このように書き換えられたのだろうか。ともかく老父に対する仕打ちは、邦訳が最も酷い。邦訳の最後に「戸棚より引出」して謝罪するだけでなく、肉を供する特別な扱いをしているのはその埋め合わせかもしれない。

『教育雑誌』のグリム童話の翻訳には、ウェーナートの挿絵が利用されていることは前述の通りである。分割連載の場合には、初回に絵が掲載された。挿絵が付けられていないのは、「怜悧なる農夫」「祖父と孫との話」の２話のみである。「怜悧なる農夫」は、ウェーナート版には訳出されておらず、挿絵も存在しない。一方の「祖父と孫との話」には挿絵（図 2）が利用できたにもかかわらず、それが使われなかった理由を考えてみたい。図 2 では男性が子どもに問いかけている。年配であり、スプーンを手にしていることから祖父であることが分かる。もともとグリム版では、何を作っているかを子どもに尋ねるのは、「若い父親」であった。デイビスはそれを忠実に英訳している。ところがウェーナート版のテクストでは――誤訳か意図的な変更かは不明だが――祖父が尋ねている。ウェーナートが挿絵に描いたのもその場面であろう。『教育雑誌』のテクストでは、尋ねるのは幼子の父親で、デイビス訳と一致している。その上、邦訳では祖父を「戸棚の中に押込めて」いるため、挿絵に描かれた状況とは合致しない。図 2 のみが『教育雑誌』で利用されなかったのはそのためと考えられる。

3.5.「猫と鼠と友となりたる話」【猫と鼠の共暮らし】（KHM 2）

猫と鼠が、冬に備えてヘット（ラード）が入った壺を手に入れ、しまっておく。ところが猫は、それを３回に分けてひとりで食べてしまう。初めてヘットを食べた後に猫は、ひげをぬぐう（6-Bd.1. S. 7）と、グリム版には描写されている。『教育雑誌』では「壺の事を思ひ出してハ口なめずりして居たりしが」となっている（第 26 号）。これもデイビス訳の “she licked her lips, as

often as she thought of the jar of fat." (S. 5) と一致する。ウェーナート版では "and stroking his whiskers as often as he thought of the pot of fat." (S. 4) であり、グリム版と同様にひげとなっているからだ。(猫はドイツ語では女性名詞で、デイビス訳では she だが、ウェーナート版では he となっている。)

さらにヘットの入手方法にも着目してみよう。『教育雑誌』には、「鼠も實然(もつとも)なりとて軈(やが)て何處(いづこ)よりか獣肉の脂肪を容(いれ)たる壺一箇を盗み出せしが」(第 26 号) とあり、盗んでいるのが目をひく。英語訳を比べてみよう。

> Wehnert: This advice was followed, and a pot was bought with some grease in it. (S. 4)

> Davis: The good advice was followed, and a jar full of fat was obtained; (S. 5)

ウェーナート版では購入しているが、デイビス訳では、手に入れるという表現で、具体的な方法は明らかにされていない。グリム版には angekauft (6-Bd.1. S. 6) とあり、購入している。ウェーナート版はその直訳となっている。邦訳の「盗み出」すというのは、デイビス訳をもとにしながら邦訳者が意訳したものと思われる。

猫と鼠は、壺を隠すのに安全な場所として、ドイツ語でもデイビス訳でも教会の祭壇を選んでいる(ウェーナート版は教会のオルガンの下としている)。それが邦訳の段階で「寺」の「佛壇」の下とされた。教会を寺に置き換えるのは、明治時代の翻訳では珍しいことではなかった。[21] その他の洋風のものも日本のものと取り替えられている。前節の「祖父と孫との話」の原話では、老父は「スプーン」を持つ手がふるえて「スープ」をこぼすのだが、邦訳では「茶碗」を持つ手がふるえて「飯」をこぼすことに変更されている。

---

[21] 「教会」が「寺」と翻訳されることに関しては、拙論 (西口 2016 年、462 頁) 参照。

3.6.「金色の鶯鳥の話」【金の鶯鳥】（KHM 64）

森に木を伐りに出かける長男に、母親はおいしいすてきなパンケーキ（einen schönen feinen Eierkuchen）とワインを一瓶持たせている（6-Bd.1. S. 402）。これは『教育雑誌』では「鶏卵（たまご）と砂糖にて造りたる奇麗なる菓子一箇と葡萄酒一瓶とを齎（もたら）して遣ハしけり」（第 27 号）と表現されている。卵と砂糖で作るという説明的な文は、当時パンケーキが知られていなかったために邦訳者が書き加えた説明だと想像したくなるが、実際にはどうであろうか。

> Wehnert: and before he went his mother gave him a fine large pancake and a bottle of wine to take with him. (S. 207)

> Davis: and his mother gave him a nice rich cake, made with eggs and sugar, and a bottle of wine, to take with him, (S. 281)

この表現もデイビス訳によることが分かる。ウェーナート版ではそのままパンケーキという単語が用いられているのみで、特に説明はされていない。

3.7.「盗賊の花婿の話」【強盗の婿】（KHM 40）

粉屋の娘が結婚相手の家を訪ねる前に、ポケットに「エンドウ豆とレンズ豆」を入れている。帰り道の目印として撒くためである。『教育雑誌』では、「豌豆（えんどう）と亞麻（あさみ）の仁」（第 28 号）と翻訳されている。ウェーナート版では “beans and peas” (S.135)、デイビス訳では “peas and linseed” (S. 165) である。peas（エンドウ豆）は両版に共通するが、邦訳の「亞麻の仁」に相当する linseed はデイビス訳のみにみられる。

3.8.「アリースの話」【賢いエルゼ】（KHM 34）

この話では、エルゼ（アリース）は、自分が本当に賢いエルゼであるかどうかも分からなくなる。最後は、家から閉め出されてさまようが、村のどこにも泊めてもらえない。

『教育雑誌』: 遂(つひ)に宿かるべき家なく遂に走りて村より出で行衛(ゆくへ)知れずなりたりとなん（第 29 号）

Wehnert: and so nobody would receive her. Then she ran straight away from the village, and no one has ever seen her since. (S. 107)

Davis: and she could find shelter nowhere, therefore she ran and ran out of the village, and nobody has seen her since. (S. 140)

英語訳と比較した場合、下線部からは、デイビス訳のほうが邦訳に近いということが推測されるのみである。この話一話のみでは判断は不可能だが、『教育雑誌』の場合には、他の話においてもデイビス訳の特徴がみられるため、この話もデイビス訳が使われたと推測される。

3.9.「デーム、トルードの話」【トルーデおばさん】(KHM 43)

デイビス訳のタイトルが “Dame Trude” で邦訳に近いことは既に指摘した。

これは、親の忠告を聞かずにトルーデのところに行く少女の話である。少女が見た黒い男は、邦訳では「石炭擔夫(かつぎ)なり」(第 30 号) とトルーデは言う。グリム版では「炭焼き (Köhler)」で、ウェーナート版では “That was a collier” (S. 137) である。デイビス訳では “that brings the coals” (S. 172) と翻訳されており、やはり邦訳に近い。

少女はさらに、「頭が燃えている悪魔（mit feurigem Kopf)」（グリム版 6-Bd.1. S. 251）を見る。『教育雑誌』では「頭」ではなく「只だ眼のピカピカしたる惡婆」とある。ウェーナート版では “a creature with a fiery head” (S. 137) で「頭」であるのに対し、デイビス訳は “the wicked one with flaming eyes” (S. 172) と「目」となっている。ここにもデイビス訳の特徴が残されているわけである。

3.10.「老狗「サルタン」の話」【老ズルタン】（KHM 48）

老いて飼い主に撃ち殺される運命の犬を、狼が助ける。犬の飼い主（夫婦）が農作業の間に「いつも子どもをやぶの後ろのかげに（hinter die Hecke in den Schatten）寝かしておく」（グリム版 6-Bd.1. S. 281）ので、狼がその子をさらい、犬が子どもを奪い返すという芝居を打つのだ。

『教育雑誌』では「必らず那(か)の赤兒をも伴ひゆきて畝(はたけ)の垣の下(もと)にねかしおくべし」（第 31 号）とあり、赤ん坊が寝かされるのは垣の「下」である。ウェーナート版では “behind the hedge in the shade” (S. 147) で、デイビス訳は “in the shade under a hedge” (S. 185) である。ウェーナート版は behind でドイツ語 hinter の直訳だが、デイビス訳では under で、邦訳の「下」に一致している。

3.11.「狼と狐との話」【狼と狐】（KHM 73）

食べ物を要求する狼に対して、狐は「ある農家（Bauernhaus）で、おかみさん（die Frau）が今晩パンケーキを焼くことになっている」（グリム版 6-Bd.1. S. 443）と言う。狐と狼はそれを奪いに出かける。その場面は『教育雑誌』では、「この夕方一家(あるうち)で婦人が」「焼く」（第 32 号）と翻訳されている。ウェーナート版では country-house で cook が（S. 223）、デイビス訳では farm で woman が焼くとなっている（S. 305）。ウェーナート版では焼く人物が「料理人」に変えられており、邦訳はこの話においてもデイビス訳に近い。ドイツ語のパンケーキ（Pfannkuchen）は、英訳ではどちらも pancakes となっているが、邦訳では「煎餅」に変えられている。当時はまだパンケーキは一般的ではなかったためだろう。

3.12.「マダム、ホールの話」【ホレおばさん】（KHM 24）

デイビス訳のタイトルが “Madam Holl” で邦訳に近いことは既に指摘した。

井戸に飛び込んだ継娘は、ホレの家に辿り着き、そこで家事を受け持つことになる。とりわけ印象的なのが、羽根布団を振るう作業である。そうすると地上では雪が降るのだ。ドイツではこの言い伝えはよく知られている。【ホ

図 3　クラウディウス画【ホレおばさん】
筆者蔵

図 4　ウェーナート画【ホレおばさん】
筆者蔵

レおばさん】のテクストには「そのため、ヘッセンでは、雪が降ると、ホレおばさんがベッドを整えているというのです」（6-Bd. 1. S. 154）というグリム兄弟による注釈も付けられている。その場面は挿絵としても頻繁に描かれている。定番は継娘が家の中から上半身を外に出し、羽根布団を振るう姿で、背後にホレが描かれることも多い。クラウディウス（Wilhelm Claudius 1854-1942）による図 3 のように、さらに人間界で雪が降る様子を一枚の絵の中に描きこむ場合もある。ちなみにウェーナートが描いたのは、娘が井戸に飛び込む場面（図 4）で、それが模刻されたものが『教育雑誌』第 33 号に使われた。

『教育雑誌』に掲載された翻訳は、原作に比べて非常に短い。削除の例として、雄鶏の「キッケリキー（コケコッコー）、金のお嬢さんのお帰りだ」、「キッケリキー、汚いお嬢さんのお帰りだ」がある。ドイツでは良く知られたフレーズだが、これらは邦訳では削除された。そして全体として話が短縮されているため、底本を特定するのが困難である。ここでも非常に些細な点に着目しなければならない。以下に引用するのは、家にやって来た娘に、ホレが話しかける言葉である。

『教育雑誌』: 何を恐れて逃行くぞ汝（なんぢ） 此處に來りて我がために寝床をのべて毎朝これを振ひくれよ何も怒るることはなし我はマダム、ホールなるぞ（第 33 号）

一般的には、ベッドメーキングは朝に行われることが多いだろうが、朝にしか雪が降らないように聞こえるのは都合が悪い。もとのグリム版では特にベッド（羽根布団）を振るう「時」は明示されていない。二つの英語訳を比べてみよう。

Wehnert: “What are you afraid of, my child? Stop with me: if you will put all things in order in my house, then shall all go well with you; only you must take care that you make my bed well, and shake it tremendously, so that the feathers fly; then it snows upon earth. I am 'Old Mother Frost.'” (S. 75f.)

Davis: “What do you fear?” cried the old woman; “stay with me, my dear, and if you will do all my work very nicely, it shall be well for you; only you must be very careful to make my bed properly, and to shake it every morning, that the feathers may fly, for then it snows upon the earth. I am Madam Holl.” (S. 102)

デイビス訳には「毎朝」とあるが、ウェーナート版にはない。ここにもデイビス訳の特徴が邦訳文に残されているわけである。邦訳では雪が降るという箇所が削除されているのは、当時は羽根布団も使われておらず、それを振るうと雪が降る、というイメージが伝わりにくかったためだろう。デイビス訳のみならず英語訳では翻訳されている。

3.13.「鷦鷯と熊の話」【みそさざいと熊】（KHM 102）

熊の侮辱に対して、みそさざいの子どもが憤慨する。親が熊に謝罪を求め、「さもなくば、おまえのあばら骨を蹴ってばらばらにする」（グリム版 6-Bd.

2. S. 103）と脅す。『教育雑誌』では、ここは「汝が悪口したる罪を我子供に詫びよ若(も)し出で來らざれば汝の肉体ハ骨節皆な裂き破らるべし」（第 35 号）となっており、下線部がグリム版とは少し異なっている。ウェーナート版では “else your ribs shall be crushed in your body!” (S. 325)、デイビス訳は “or every bone in your body shall be broken.” (S. 345) である。この話でも、肋骨（あばら骨）だけでなく「骨節皆な」という表現にデイビス訳の特徴が残されている。

3.14.「狐と狼との話」【狐と代父を頼む奥様】（KHM 74）

出産した狼が、狐に名付け親を頼む。狐はやって来て、選ばれた名誉に対して礼を述べる。（6-Bd. 1. S. 445）『教育雑誌』では「斯て狐ハその期日を違へず狼の許(もと)に來り」（第 36 号）とあり、グリム版では言及されていない「期日を違えず」にという表現が特徴的である。ウェーナート版は “The Fox appeared to be very honourable, and said to the Wolf, …” (S. 224) で、該当する言葉はない。デイビス訳には “The fox appeared punctually at the time appointed, and said, …” (S. 306) とあり、punctually が「期日を違えず」と翻訳されたとみられる。

3.15.「怜悧なる農夫」【賢い人たち】（KHM 104）

「怜悧なる農夫」(【賢い人たち】)はウェーナート版には訳出されていない。デイビス訳のタイトルは “The Wise Peasants” で、前述の通りドイツ語で “Die klugen Leute” の複数形が踏襲されている。ただしドイツ語の「人々」をデイビスが「農民たち」に変えているのは、主要な登場人物がみな農業に従事しているからであろう。邦訳の「農夫」はデイビス訳に近いが、そこに農婦は含まれていないようだ。

ここで、「賢い」という言葉が『グリム童話集』ではアイロニカルに使われる場合もあることに注意したい。リューティが指摘するように【賢い百姓娘】（KHM 94）と【賢いグレーテル】（KHM 77）の女主人公は本当に利口で抜け目がないが、【賢いエルゼ】（KHM 34）や【利口なハンス】（KHM 32）は実際には愚かで、「話の聞き手や読者はくすくす笑いながら自己の優越性を楽

しむ」[22] のだ。

では、【賢い人たち】はどちらだろうか。原話では、「農夫」以外の登場人物――すなわち彼の妻、道で出会う農婦、その息子――はみな愚かな行動をとり、読者を笑いに誘う。【賢い人たち】が複数形であるため、「賢い」ひとりの男性を指すのではなく、複数の人を指しアイロニカルな意味で使われていると考えられる。[23] デイビス訳でも複数形の「農民」であるので同様だろう。『教育雑誌』の「怜悧(りかう)なる農夫」のみは、「農夫」で男性を示しており、他人を騙す「農夫」ひとりを意図しているとみられる。つまり邦訳での「怜悧」は、アイロニカルな意味では使われていない。

この話の実際に賢い農夫は、出会った農婦が自分の妻より愚かかどうかを試すため、次のような嘘をつく。あなたの夫は天国で羊の番をしており、服はボロボロになってしまった。ところが「昔話にあるように、聖ペテロが仕立て屋をひとりも中に入れない」から、ボロを着たままだ、と（「小さい版」9 版 S. 252）[24]。グリム版テクストの下線部が、【天国の仕立て屋】（KHM 35）を暗示していることに『グリム童話集』の愛読者ならば気付く仕掛けとなっている。【天国の仕立て屋】では、聖ペテロに頼んで天国に潜り込んだ仕立て屋は、結局、神によって追放される。『教育雑誌』では「天にハ裁縫師といふものなければ新しき衣服を調(ととの)へんやうもなし眞個(まこと)に哀れなる有様なり」（第 37 号）となっており、【天国の仕立て屋】との関連は示唆されていない。それは、邦訳者の能力不足によるものではない。また邦訳者がデイビス訳の他の話を読んでいなかったということにもならない。というのは、デイビスが【天国の仕立て屋】を忠実に英訳していないからである。タイトルが “The Tailor in Olympus” と変えられていることが象徴しているように、話全体がローマ神話の世界に置き換えられ、ペテロは Mercury に変えられているのだ。英語訳ではしばしば行われているように、キリスト教的な内容をこうして回

---

22 リューティ、マックス『昔話の解釈』野村泫訳、ちくま学芸文庫、1997 年、120 頁。
23 この「農夫」の他にも、博労（牛買い）の二人はずる賢さを発揮し「農夫」の妻を騙しているが、冒頭で少し登場するだけである。
24『グリム童話集』「大きい版」1857 年版では、テクストに少々手が加えられている。この話では auch が省略され、heilige が省略形の heil に、ihr が大文字の Ihr となっている。（7. Aufl. Bd. 2, S. 93.）

避しているのである。[25] デイビス訳 “The Wise Peasants” においては、（登場人物ではなくここで引き合いに出されるだけの）聖ペテロは変えられることなく Saint-Peter と英訳されているため、二つの話の中で名前が異なっており、デイビス訳を読む限りでは両話の関連に気づきようがないのである。

この「怜悧なる農夫」に挿絵がないのは、既に指摘したようにウェーナート版に訳出されておらず、挿絵も存在しないためである。ここで補足しておくと、デイビス訳にはトムソン（George Thompson 生没年不詳）が描いた 8 枚の挿絵が添えられている。その中には、【賢い人たち】も含まれているのである（図 5）。『教育雑誌』に訳出された話のうち、【ホレおばさん】（図 6）と【金の鵞鳥】にも挿絵が一枚ずつ描かれているのだが、いずれも邦訳では利用されなかった。トムソンによる挿絵は、ヨーロッパでも評価が芳しくないが[26]、日本でも同様だったようだ。『教育雑誌』に使われたのは全てウェーナートの挿絵であった。ただしウェーナートによる【年とった祖父と孫】（図

図 5　トムソン画　【賢い人たち】
リヨン市立図書館蔵

図 6　トムソン画【ホレおばさん】
リヨン市立図書館蔵

[25] Sutton 1996 S. 192ff.
[26] Zirnbauer の評価も高くない。Zirnbauer, Heinz: Grimms Märchen mit englischen Augen. In: Brüder Grimm Gedenken. Bd. 2. Marburg 1975, S. 203-245, hier S. 220.

2）のみは、採用されなかった。その理由は、本稿 3.4.節で考察した通りである。

おわりに

以上の考察より、『教育雑誌』に訳出された全ての話が、デイビス訳を底本としていると考えられる。

一つ問題点として残るのは、デイビス訳の書名が “Home Stories. By the Brothers Grimm” であることだ。本稿の冒頭で指摘したように、『教育雑誌』のタイトルに続けて「グリンムス、フェーヤリー、テールス譯出」と記されているのだが、それと一致しないのである。連載の初回に掲載された「「スクアイヤ」、コーブスの話」の冒頭にも「此話は「グリンムス、フェーヤリー、テールス」より譯し出せるなり」（第 22 号）とある。それが書名を意図するのであれば、ウェーナート版の書名と一致するが、話のタイトルはデイビス訳の “Squire Korbes” に一致している。

そこで、デイビスによる序文（Prefatory Remarks）をみると “GRIMM’S FAIRY TALES” という言葉が全て大文字で、視覚的に強調される形で使われている。それを訳出したもので、新訳であると述べているのだ。[27] 邦訳者がここから「グリンムス、フェーヤリー、テールス」という言葉を採用したと考えることも可能である。

一方で、挿絵および「グリンムス、フェーヤリー、テールス」という言葉は、ウェーナート版から採用した可能性も考えられる。ウェーナートが描いた挿絵は、適当な話に利用するのではなく、どれもが該当する話に間違わずに添えられている。そのため邦訳者や編集者は、デイビス訳とウェーナート版が同じ『グリム童話集』の英語訳であることを理解していたとみられる。

もう一つの可能性としては、デイビス訳を収めた “Grimm’s Fairy Tales” という書名の、ウェーナートの挿絵を付けた版の存在も想定できる。残念ながらこれまでのところそうした版は確認されていないが、廉価版の場合、紙

[27] デイビス訳、Davis S. iv.

質が悪く現存しない可能性もあるため、この可能性も排除はできない。いずれにせよ、挿絵はウェーナートの摸刻であり、翻訳文はデイビス訳によるとみられる。

世界におけるグリム童話の受容をみても、初期にはドイツ語の原典からではなく、他の外国語訳からの重訳である場合が少なくない。日本では英語訳が目立つが、『教育雑誌』の翻訳も同様に英語訳（デイビス訳）によることを本稿で確認することができた。

【トルーデおばさん】の日本での初訳は、先行研究では『児童文学翻訳作品総覧第 4 巻』所収のグリム童話「翻訳作品別目録」[28] にあるように、明治 24 年の『西洋妖怪奇談』所収の「老魔女」だとされてきた。それが「デーム、トルードの話」というタイトルで 4 年も以前に翻訳されていたのである。さらには、「祖父と孫との話」「アリースの話」「狐と狼との話」の 3 話に関しては、大正 13 年の金田鬼一による『グリム童話集』の全訳が初訳と考えられてきた。これらが、既に明治 20 年に日本に紹介されていたことが、府川の調査で明らかになったわけである。

興味深いのは『教育雑誌』が商業誌であり、特定の地域や会員に限って配布されたものではないという府川の指摘である。ここに訳出されたグリム童話は読者にどのように受け止められたのだろうか。訳出された話が、今日の日本ではほとんど知られていない話が多いだけに今後の研究の進展が期待される。

[28] 川戸道昭他編『児童文学翻訳作品総覧 第 4 巻 ドイツ編』大空社、ナダ出版センター、2005 年。